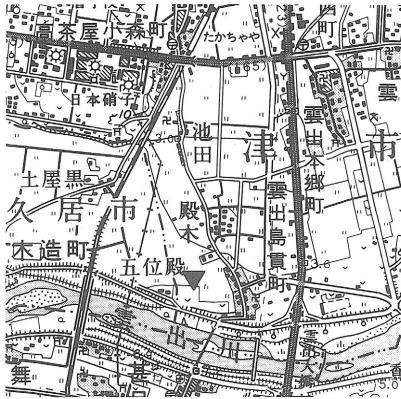


三重・雲出島貫遺跡

くもづしまぬぎ

- 1 所在地 三重県津市雲出島貫町字町中
- 2 調査期間 一九九八―第二次調査 一九九八年(平10)七月
～一九九九年二月
- 3 発掘機関 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 伊藤裕偉・水谷 豊・豊田祥三
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代晩期～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(松 阪)

遺跡は雲出川北岸部で、雲出川が形成した自然堤防上の標高3m

前後の微高地に位置する。

一世紀後半～一三世紀中葉に、人工流路を外郭とし、内側に別の大規模な堀を伴う居館が存在していた。居住域からは膨大な量の京都系土師器が出土した。大溝(堀)を挟んだ居住域の北側には単基の木棺墓があ

り、そこから青磁・白磁の椀皿類七点、藍鮫皮地で漆塗の腰刀、漆塗小箱入りの菊花双雀鏡(方形鏡)など、豪華な副葬品が出土した。

この木棺墓に関連するとみられる笹塔婆が、人工流路下層から五点出土している。頭部形態は、五輪塔状のもの、方頭のものがあり、五輪塔状頭部のものより、文字が確認された。この他に、刀・鏃・弓を象った木製形代なども出土している。

当遺跡の西隣は久居市木造町で、ここは平氏を領家とする六条院領木造荘の故地である。前述の状況から考えると、当遺跡の形成主体が伊勢平氏であった可能性は極めて高いと考える。

8 木簡の积文・内容

(1) 「く南无不動真言」

(380)×30×6 061

人工流路下層は、共伴する土器から一三世紀初頭までに埋没している。笹塔婆の時期は一三世紀後半頃と考えられる。时期的にみて、十王(十仏)信仰に伴う供養塔であろう。

なお积読には、藤澤典彦氏のご教示をいただいた。

9 関係文献

伊藤裕偉「神宮領嶋拔御厨と六条院領木造荘」(『あるく中世』一五二〇〇年) (伊藤裕偉)



(伊藤裕偉)